

はじめに

本編は、第一章で自然分野から記述を始め、その位置や地質、地形という本町を取り巻く自然環境を紹介した。本町の東は鰐塚山地に囲まれ、町域の約七〇％が森林・原野という自然環境の色濃い町である。都城盆地の南東に位置する本町は隣接する都市と地理環境が似ており、その歴史的な歩みを共にしてきたことは、この自然・地理的環境の類似性がもたらしたのかもしれない。本町の地質に目を向けると、南九州特有のシラス台地が形成されており、重層的に火山灰が形成されていることが特徴である。また、第一章では本町の気候や人口についても概略を述べた。

第二章では、文字のない時代である「先史時代」を中心に記述した。文字のない時代の歴史をいかにして明らかにしていくかについては、考古学的方法が有効であり、具体的な方法である発掘調査について触れた。歴史を明らかにするためには年代の解明も不可欠であり、その方法として代表的な放射性炭素年代測定法について説明を行った。ここでその指標となるのが前述した火山灰層であり、重層的に蓄積している火山灰の年代を特定することで、その前後で出土した遺物の年代をも推定することが可能なのである。それらの調査成果をまとめたものが発掘調査報告書であるが、本町では発掘調査自体の事例が少なく、その蓄積が希薄であることから都市の事例を中心に、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺跡を引き合いに出しながら、本町の先史時代の様子の一端を垣間見ていくこととした。

本町で旧石器時代の遺跡は確認されていないが、宮崎県内と都城盆地の同時代の遺跡に目を向け、どのような遺物があり、当時の人々がどのような暮らしをしていたのかを概観した。

縄文時代に入ると、本町でも遺跡が確認され始める。旧石器時代との大きな違いは土器が製作され始めたことであり、石器についても旧石器時代と異なり、定住生活の進展に伴って多種多様な用途に応じたものが製作され始め、人々の創意工夫が顕著になり始めた時代といえる。本町の縄文時代の代表的な遺跡は長田地区の長原遺跡（長原の丘）であろうが、発掘調査は行われていない。ただ、遺跡の周辺で採取された土器や石器から縄文時代初頭の遺跡や後期の拠点的な集落跡が存在する可能性を指摘した。

弥生時代は、稲作や金属器の使用が始まる時代であるが、その時代区分は近年の調査成果によって年代が繰り上げられている傾向にあり、今後もデータの蓄積によって年代が変わることも予想される。都城盆地における弥生時代の発掘調査事例は豊富であり、本書で数多くの事例紹介を行い、その特徴を記述した。本町においても遺跡詳細分布調査によって多数の弥生時代の遺跡が登録されている。

古墳時代はその名のとおり、古墳が築造された時代であるが、本町には前方後円墳などの高塚墳や南九州特有の地下式横穴墓が存在する可能性は低い。ただ、同時代の竪穴住居跡群の発掘調査は実施されており、それが梶山地区の中原遺跡である。報告書が刊行されておらず、全容が明らかでないが、一五基の竪穴住居跡が発見され、出土した土器などから古墳時代中期から後期にかけての遺跡として紹介を行った。

第三章では文字史料の時代となる奈良・平安時代を記述した。ただ、『古事記』『日本書紀』以上の文字史料が出現するのはもっと後のことであり、三股関連の史料はほとんど見当たらない。発掘調査の成果と歴史史料の融合が必要な時代である。本町の歴史を見ていくには、島津荘や三俣院が史料上で散見され始める九世紀後半を待たなければならぬ。本書をきっかけにして今後研究が蓄積され、将来は本町の史料を中心にして本編が記述されることを期待したい。